

# 1 【 仙台市立 立町 小学校 】

# 2 【 仙台市立 木町通 小学校 】

## 仙台市立 木町通小学校

### 校歌

土井 晚翠 作詞  
福井 文彦 作曲

- 一、木町通小学校  
明治六年はじまって  
えらい人たちが育てきた  
その後について勉めましょう
- 二、青葉の山と広瀬川  
高いほまれの藩祖公  
三百年のおんかたみ  
眺めて日々に励みましょう
- 三、かがやく光 東から  
東西南北 四つの海  
世界すべてが睦むよう  
みんなで奮発いたしましょう

校歌の歌詞にもあるように、木町通小学校は明治6年に「第4番小学校」として開校しました。初代校長矢野成文先生が名付け親となり明治9年「培根小学校」と改名、昭和22年に「仙台市立木町通小学校」となり、現在に至っています。「培根達支」の精神は、今も校是として引き継がれています。

土井晚翠先生は、入学から立町小学校へ転校するまでの3年間を本校で過ごされました。昭和22年、天皇陛下の行幸を記念して晚翠先生にお願いしてつくっていただいたのが、この校歌だそうです。先生にとって、校歌としては一番最後の作です。「今回は特別に、生まれて初めて童話調で書いてみました」とのご本人のお言葉が残されています。当時の校歌のイメージとは全く違った、新しいかたちの校歌だったようです。

今年151周年。春は満開の桜、秋には黄金色の銀杏に見守られながら、502名の子供たちが元気いっぱい過ごしています。

## 仙台市立 立町小学校

### 校歌

土井 晚翠 作詞  
田村 虎蔵 作曲

- 一、仰げば高し天守台  
俯せば流れも広瀬川  
桜が岡にとり合おう  
ゆかしき庭に今立てる  
校は開きし古の  
その立町の名を変えず
- 二、桜ほまれの花薫る  
わが行く末もしかあれや  
仰ぐ昔の跡もよし  
清きはかけか我が心  
努めて倦まず身をたてて  
国と民のためつくせ

立町小学校は、明治6年7月7日、第7番小学校として開校し、明治9年からは「琢玉小学校」と称しました。明治12年に「立町小学校」と改称し現在にいたります。「玉不琢不成器（玉みがかざれば器をなさず）」の精神を引きつぎ「あかるく」「ゆたかに」「こんきよく」を校訓として子供たちは学校生活を送っています。

立町小学校の校歌は、本校の卒業生である晚翠先生に大正14年につくっていただきました。校内には「土井晚翠校歌資料室」もあり、海外から見学に来られる方もおられます。また、学校の正面玄関を入ると「荒城の月」が流れ学校内に晚翠先生の息吹が感じられます。

校歌の歌詞にあるように、校区には史跡や桜の名所、広瀬川や青葉山が現在も残っています。創立150周年を迎え、これからもこれまでと同様に、子供たちは晚翠先生が校歌に込めた思いを感じながら歌い継いでいきます。

今日は立町児童合唱団と有志で歌います。どうぞお聞きください。

### 3 【 仙台市立 片平丁 小学校 】

- 一、塊積り山となり  
滴集り川となる  
青葉の山に広瀬川  
向いのぞめる学びの舎
- 二、無言の教ゆたかなる  
山と水とを見渡して  
日々に勉めて一生の  
基をこゝに養わん
- 三、よくはげむ後よく遊び  
正しき心すこやか  
身に智を集め技修め  
一日も夢と過すまじ
- 四、小さき幼き今日ながら  
二千年の世々のあと  
嗣ぎて第二の国民の  
責を務を負わん身ぞ
- 五、国の内外に名をあげし  
傑れし人はいにしえに  
今に多きを心して  
われ亦跡を追いゆかん

#### 校 歌

#### 仙台市立 片平丁小学校

土井 晚翠 作詞  
大槻 貞一 作曲

### 4 【 仙台市立 秋保・馬場・湯元 小学校 】

- 一 大東岳四千尺  
ふもとをもちの名取川  
途に不動の大滝を  
含みて海にそそぎいる  
宮城の県 秋保郷  
わが学園のあるところ
- 二 金剛たえてゆるがざる  
国の姿とそそりたつ  
磐神岩を仰ぐとき  
千歳古き名湯の  
玉なす中に浸るとき  
感謝は郷にまた国に
- 三 この名邑に生れいで  
この学園に 教えうけ  
強く正しく 明朗に  
日々に努めて 身と心  
ねりてきたえて 一斉に  
国と郷とに 尽すべし
- 土井 晚翠 作詞  
福井文彦 作曲

秋保小学校は、明治6年に「宮城県第3中学校区第4番長袋小学校」として開校しました。そして、その後の学制改革により、昭和22年に「秋保小学校」と改称されました。馬場小学校は、「長袋小学校」の分校として明治9年に創立され、昭和26年に「馬場小学校」として独立しました。湯元小学校は、明治6年に「宮城県第3中学校区第4番茂庭小学校湯元支校」として開設され、昭和26年に「湯元小学校」として独立しました。

現在の校歌は、昭和22年に「秋保小学校」と改称された年に、制定されました。その後、昭和26年に「馬場小学校」「湯元小学校」が独立する際に、秋保小学校時代の歴史と伝統を共有し、地域の人々の思いや願いを引き継ぎたいという意志で、両校の校歌としても制定されました。晚翠先生の格調の高い歌詞と、福井先生の歌いやすい曲調により、子供たちのみならず、地域の人々みんなに親しまれています。秋保の豊かな自然を思い浮かべながら、どうぞお聞きください。

片平丁小学校は明治6年、五番小学校として開校しました。卒業生には、文化勲章を受章された志賀潔氏や野副鉄男氏、西澤潤一氏をはじめ多くの著名人がおります。

本校は、西に広瀬川と青葉山を望み、学区内に瑞鳳殿や東北大学もあり、自然や文教、歴史的な環境に恵まれた地域にあります。現在530名の児童が、「身に智を集め技修め 一日も夢と過ごしまじ」の歌詞のように、生き生きと学校生活を送っています。

春には「片平地区みんなの大運動会」、秋には「かたひら waiwai 広場」など、地域の皆さんと様々な行事を楽しんでいます。

大正3年に制定された校歌は、毎年行われる同窓会や姉妹校として交流している北海道白老町の白老小学校でも歌われるなど、大切に歌い継がれています。今日は、プラスバンド部の有志が校歌を披露します。どうぞお聞きください。

## 5 【 仙台市立 第二 中学校 】

一、青葉廣瀬の山と水  
そびゆるはしる郷の北  
北の高等小學の  
教の庭に通ふ子よ

二、小さき種のそだつ時  
空つく高き木は繁る  
くだるしづくのやまぬ時  
堅き巖も穿たれん

三、右と左のいさゝかの  
隅末はいや遠し  
登らば雲の上までも  
降らば土の底までも

四、再び寄せぬわかき日を  
さらば空しく去らしめす  
心を磨き身を鍛へ  
後の榮の基おかん

### 校 歌

#### 北五番丁高等小学校

土井 晩翠 作詞  
幾屋 純 作曲

## 6 【 宮城学院中学校・高等学校 】

### 宮城学院中学・高等学校

### 校 歌

土井 晩翠 作詞  
ケイト・I・ハンセン 作曲

一、天にみさかえ 地に平和  
ひとにみ恵み あげくれに  
祈る導き み教えの  
光をあおぐ 姉妹

二、ああ曙よ 光明よ  
春よ 望と愛と信  
嵐も雨も むらくもも  
我には示す 明日の晴

三、わが名にしおう 宮城野の  
錦の郷に 日々に織る  
あやを 心によそいつつ  
聖なるわざに いそしむ身

四、鳩のやさしさ 清浄の  
操みどりの かんらん  
色はとこしえ 人の世に  
神のほまれを あらわさん

わたしたちの学校は、1886年（明治19年）合衆国改革派宣教師、押川方義はじめ、日本人のキリスト者によって宮城女学校として創設されました。その後、日米両国キリスト教の信仰による緊密な協力によって、女子中等教育と専門教育との両方面において一貫したキリスト教に基づく人間教育を行い、わが国の文化に寄与してまいりました。その間、本学院独自の真摯で敬虔な校風を培いもその感化は、多数の卒業生と共に、広く国の内外にまで及んでいます。

○現在歌われている校歌「天にみ栄え 地に平和」

現在、本学で校歌として歌われているものは、大正10年当時、宮城学院女学校（現在の宮城学院）の英語教師として教鞭をとっていた土井晩翠先生が、在学中の愛嬢、照子、信子姉妹が宮城学院女学校キリスト教女子青年会で活躍されたこともあり、その青年会の為に「宮城学院女学校青年会歌」として執筆してくださったものです。

作曲は、明治40年～昭和26年の40余年にわたり、本学で教鞭をとられた宣教師のK・I・ハンセン先生。賛美歌289番「みこころならば」の作曲者として知られています。

○宮城女学校創立五十周年の校歌「ああベツレヘム 星の半夜」

昭和11年に宮城女学校の創立五十周年の式典で初めて「校歌」として出てくる「宮城女学校校歌」も土井晩翠先生の作詞。それ以前は「校歌」がなく、賛美歌が歌われていました。宮城女学校創立五十周年の校歌は曲が長かったせいも、戦後にはもっぱら前出の「天にみ栄え 地に平和」が校歌として歌われるようになり、現在に至っています。

仙台市立第二中学校は、昭和22年に開校し、今年度で78年目を迎えました。

学都仙台の中心部に位置しており、学区内には、美術館をはじめ、多くの文化公共施設があります。春の「青葉まつり」、夏の「七夕まつり」、冬の「光のページェント」など、仙台の代表的なイベントにも参加する機会があり、身近に感じています。

また、西に自然豊かな青葉山、その山里を流れる清流豊かな広瀬川など、自然にも恵まれています。

北五番丁高等小学校は、大正4年4月、現在の第二中学校の場所に開校しました。校歌はもちろん土井晩翠先生の作詞によるものです。本日は、北五番丁高等小学校の校歌を流しながら、最近の学校の様子を紹介させていただきます。どうぞ、よろしくお願ひします。

## 7 【 尚綱学院中学校・高等学校 】

尚綱学院同窓会（ぶどうの会）

- 一  
 橄欖山の夕暮れの  
 歌今遠し二千年  
 山は裂くるも揺ぎなき  
 愛と望と信の道  
 聖き教の御光を  
 ここにやしまの東北  
 大和撫子姫百合の  
 花に蕾に浴びしめよ  
 二  
 金華松島塩釜の  
 ゆかりの郷の春と秋  
 色も匂も大能の  
 御手の描ける跡とみて  
 三  
 青葉広瀬をまのあたり  
 錦穿ちて綱尚う  
 深き誓心して  
 教の庭にいそしめる  
 嗚呼わが姉妹知を集め  
 操を磨け天地の  
 神の御栄光現して  
 道と邦とにつくす迄

### 尚綱学院中学校・高等学校 校歌

土井 晩翠 作詞  
 佐々木 英 作曲

今年で創立132年目を迎える尚綱学院中高（旧尚綱女学院）は、アメリカからの夫人宣教師によって立てられたキリスト教主義の学校です。明治26年に現在の場所に移転して、大正6年（創立25周年の年）に土井晩翠先生作詞・佐々木英先生作曲による「校歌」が作られました。この校歌は、本校の土台であるキリスト教と建学の精神でもある内なる豊かな女性の成長を願ってつくられた校歌です。

男女共学に伴い学校名が「尚綱学院中等高等学校」となり、今は新しく制作した「学院歌」を歌うようになりました。現在は、残念ですが「校歌」を歌うことはなくなりました。

今回は、尚綱学院同窓会の合唱サークル「ぶどうの会」で発表します。

よろしくお願ひします。

## 8 【 福島県立安達高等学校 】

福島県立安達高等学校 同窓会 仙台支部（仙台まゆみ会）

### 福島県立安達高等学校

#### 校歌

土井 晩翠 作詞  
 梁田 貞 作曲

- 一、安達のまゆみ 古しえの  
 歌によまれし 跡遠し  
 安達の名負う 高校の  
 健児きたえよ 心と身  
 健児かためよ 身と心  
 二、新たなわが世 あけぼのの  
 朱のおいを 見るごとく  
 「望」はわれを 励まして  
 高き遠きに 進ましむ  
 高き遠きを 仰がしむ  
 三、安達のまゆみ 染めなすは  
 赤き心の 象徴か  
 安達の名負う 高校の  
 健児つくせよ 国のため  
 健児つとめよ 世々のため

福島県立安達高等学校は、大正12年（1923年）4月16日、県立安達中学校として、男子100名の入学生を迎えて安達郡二本松町（現二本松市）に開校され、昨年、創立100周年を迎えました。この校歌は、創立から5年後の昭和3年に制定されました。作詞に当たって土井晩翠先生は、度々二本松を訪れ詩想を練られました。作曲は「どんぐりころころ」でお馴染みの梁田貞先生です。

校歌の出だし「安達のまゆみ」は、万葉集に詠まれた「陸奥の安太多良（安達太良山の古名）真弓…」に由来し、校章も「真弓の花」を象ったものです。同窓会の通称も「まゆみ会」です。この真弓に例えて、「強靱であれ、その木の如く」「しなやかであれ、その枝の如く」「清楚であれ、その花の如く」「誠実であれ、その朱き実の如く」と「まゆみの精神」として、代々校訓として受け継がれて来ました。

同窓生は、3万1千名を越え、国内外のあらゆる分野で活躍しています。100年の歴史の上に立ち、次の100年を見据えて、歌詞の想いを込め高らかに歌わせて頂きます。

## 9 【 福島県立福島高等学校 】

福島県立福島高等学校 同窓会 (みやぎ梅苑会)

### 福島県立福島高等学校

#### 校歌

土井 晩翠作詞  
中田 章作曲

- 一、徽章は薫のいみじき梅花  
氷霜凌げる線は清し  
健児は一千こそりて励む  
福島高校榮えよ永く
- 二、庭には湛ゆる心字の池水  
穿らし由来は尊し儼し  
六千余尺の姿をそこに  
映すや香妻の山また嬉し
- 三、大地に根を握え虚空に入りて  
高山示せり理想の跡を  
我赤日に日にわが歩を進め  
あせらず弛まず遠きに行かん
- 四、自然の眺め妙なる窓に  
朝夕無言の教へにひたり  
智徳を磨きて寸時を惜み  
紅顔あしたの誇りを思ふ
- 五、あゝ我青春望みにあふれ  
敬の庭より養うけて  
花咲きみのりて世の為立たむ  
福島高校榮えよ永く

本校は、1898年(明治31年)に福島県第三尋常中学校として福島県福島市に開校し、その後、福島県第三中学校、福島県立福島中学校と改称され、昭和23年の学制改革に伴い「福島県立福島高等学校」と改称開設され現在に至っております。

この校歌は、母校創立25周年記念事業の一環として作成され、母校の二宮敬三先生が土井晩翠先生に委嘱しました。土井先生は自ら作詞し、作曲を中田章先生に依頼し、1923年に完成しました。作曲の中田先生は、「めだかの学校」「小さい秋みつけた」「夏の思い出」などを作曲した中田喜直先生の父親で、「早春賦」を作曲したことで知られています。

その校歌の詩には、母校の佇まいや、徽章の梅に込められた「清らかであれ」「勉励せよ」「世のためたれ」の精神が見事に詠まれており、学校はその後、旧制中学校から新制高校に変わり、生徒数も増え、2003年からは男女共学となりましたが、歌詞はそのまま歌い継がれています。

私達は、宮城県在住の同窓生の集まりで、母校の徽章が梅の花であることから「みやぎ梅苑会」と称し、1996年再建設立以来、年1回の総会・懇親会をはじめ、母校の支援などさまざまな活動を行っています。

今日は、母校を誇りとし歌詞の意味を噛みしめながら、一同心を込めて歌わせて頂きます。

## 10 【 岩手中学校・岩手高等学校 】

岩手中学校・岩手高等学校 同窓会 (石桜同窓会)

### 岩手中学・高等学校

#### 校歌

土井 晩翠 作詞  
山田 耕笹 作曲

- 一、旭日ににおう桜花  
其芽大地の深きより  
出でて貫く花崗岩  
郷の名所青春の  
意気をかたどるうれしさよ
- 二、見よ金剛の不壊の念  
神と祖国と人道の  
三つに仕えて怠らず  
日々につとめて光榮を  
期する一団若き友
- 三、大沢川原もとをおく  
わが中学の同じ窓  
希望の光身に浴びて  
心ひとしくすこやかに  
高き遠きにあこがれる
- 四、無言のさとし朝夕に  
七千尺の岩手山  
北上川の八十里  
友よ心の目にも見て  
いざ向上の道踏まん

本校の前身である旧制岩手中学校は大正15年4月に創立され、戦後の学制改革により新制岩手中学校・岩手高等学校としてスタートしました。岩手県唯一の男子中高一貫校にして、盛岡市にある国の天然記念物「石割桜」を象徴とする「不撓不屈」「質実剛健」のいわく「石桜精神」の気風を涵養し、社会的有意な人材育成を目指す私学校であります。ご紹介する校歌は開校2年後の昭和3年1月に土井晩翠先生の作詞、山田耕笹先生の作曲により誕生しました。これは所謂晩翠調とも言える七五調・五言詩で、曲調は軽快なテンポで雄麗さがあります。その一番は「石割桜」の力強さが、二番には校訓の「積慶・重暉・養正」を組み入れ、三番は学園での友情を、そして四番では郷里の山河が称えられ、詠み込まれております。

我々はこの校歌に限りない愛と誇りを持っており、本日ここに石桜同窓有志一同心を込めて歌わせて頂きます。岩手中学校・岩手高等学校校歌です。

## 1 1 【北海校校友会】

- 一、天地を包む雪の色  
その寂寞の冬去りて  
緑の大野見ることく  
闇より明けし北海の  
空光明のおとずれよ  
野は石狩の奥千里  
その端ここに豊平の  
川に臨みて文教の  
基づくところ一段の  
健児集まる学びの舎  
都の花はよその春  
未来の望み身を駆りて  
寸時を惜しむ雪の  
窓のあけ暮れ幾百の  
健児手をとり睦みあう  
嵐の叫び雪に笑む  
操さながら寒梅の  
冬を凌ぎてにおうごと  
稜々の意気さかんにて  
母校の名をば揚げんかな  
威儀三千のいにしえの  
面影兼ねて新たなる  
文華の景に照らさるる  
嬉し青春生ありて  
我ぞ無窮の道を追う
- 土井 晚翠 作詞  
本居 長世 作曲

### 北海高等学校校歌

清秋の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

本日、第10回「土井晚翠先生が作詞した校歌と一緒に歌いましょうの会」が盛会に開催されました事、心よりお祝い申し上げます。また、実行委員会の皆様、仙台市立町小学校関係者の皆様に感謝と御礼を申し上げます。

北海道は札幌より北海高等学校を母校とする「北海校校友会」が参加させて頂く事となりました。北海高等学校は、1885年（明治18年）に創立し、今年で139年を迎えました。創始者、大津和多里が青年たちに語りかけた事が北海の源流です。大津氏は仙台藩士であり、後に札幌農学校（現 北海道大学）に入学。そして、将来有望な青年たちの為に教育の場へ突き進む事となります。

北の大地に伝統を刻み続ける第一歩、北海英語学校（後の北海中学、現 北海高等学校）の始まりでした。その後、戸津高知氏（明治5年仙台生まれ）が北海中学第2代校長に就任し、「文武両道・質実剛健・百折不撓・自由と正義」という北海の校風を育てられました。この戸津氏が同郷の土井晚翠先生に校歌を依頼し、晚翠先生により作詞され、間もなく本居長世氏によって作曲されたという事です。

このように仙台とのご縁の中で完成された我が校の校歌は、北海精神そのものであり、卒業して年月が流れようとも消える事のない心の支えとなっております。

本日は、北海の先人達と土井晚翠先生を偲び、感謝の意を表するとともに、日本三大校歌と称されております母校北海高等学校校歌を卒業生4万人と在校生の想いを込めて歌いあげたいと思います。我が校シンボルである応援団OB会を引き連れて参りましたので、エールのもと声高らかに披露させて頂きます。

末筆ながら、仙台と北海との深い絆を想い、貴会の益々のご発展と、皆様方のご健勝を祈念致しましてご挨拶とさせて頂きます。

## 1 2 【群馬県立太田高等学校】

### 群馬県立太田高等学校

#### 校歌(乙) 式場歌

土井 晚翠 作詞

楠美 恩三郎 作曲

- 一、赤城浅間を軸として  
八州の野の開く端  
貫き走る大利根の  
岸は母校のたつところ  
やまさる流高き山  
無言の教あゝ彼に
- 二、操はしるぎ中黒の  
旗の風に飛びし場  
坂東武者の代々つぎて  
雄たけび高くゆりし郷  
大田高校高き名を  
伝えむ責はあゝ我に

群馬県立太田高等学校は、明治30年に「群馬県尋常中学校新田分校」として群馬県新田郡太田町（現太田市）に開校しました。その後明治33年に「群馬県太田中学校」として独立、翌明治34年に「群馬県立太田中学校」となり、昭和23年の学制改革に伴い、「群馬県立太田高等学校」と改称、現在に至っています。

太田高等学校校歌は、明治37年ごろに制定されたといわれています。初代校長の三浦菊太郎先生が、第二高等学校の同窓生である土井晚翠先生に校歌の作成を依頼し、当時の太田中学校の所在地ならびに周辺の地図や太田に関する資料を送りました。土井晚翠先生は、一度も太田に来ることなしに、地名や歴史を織り込んだ甲（行軍歌）と乙（式場歌）の校歌二曲を作りました。こうしてできあがった校歌は、100年以上にわたり太田中学校・太田高等学校の生徒に歌い継がれていきました。太田高等学校校歌は、群馬県内の高等学校校歌としては最古のものです。

ちなみに昭和17年5月6日、偶然にも土井晚翠先生が太田中学校を訪れて講演を行いました。その際生徒が誇らしく高らかに式場歌を歌い、土井晚翠先生は校歌をじっと聞きほれていたそうです。

本日は、土井晚翠先生に聞いていただいた太田高等学校校歌乙（式場歌）を披露いたします。

# ☆【愛知県新城農蚕学校】

## 愛知県新城農蚕学校

### 校歌

土井 晚翠 作詞  
中田 章 作曲  
鈴木真喜生 編曲

一、歴史に名高き戦場近く

産業豊かに地の利を占むる

新城今見る斯道の校舎

豊川しづかに其のもと流る

四、自然の恵を此の身に占めて

二、大地に起りて蜜井を凌ぐ

鳳来寺の山偉なる仰ぎ

学芸はたまた近きに起り

高きにいたるを願ひ思ふ

五、人文人道わが世を照らす

三、小さき生物小さき種粒

やどすや何等の微妙の力

農蚕ひとしく国家を富まし

郷土の栄を誉を進む

造化の巧を補ひ足さん

天職おのおの高きを感じ

科業に日に日に研磨の勇み

科業に日に日に研磨の勇み

光明逐ひつつ勉めてやます

青春盛りの歓喜に満ちて

無限の希望に溢れて行かん

愛知県から「新城農蚕学校（しんしろのうさんがっこう）」の校歌を紹介させていただきます。

東日本大震災からの復興の応援の気持ちを含めつつ、遠く、愛知県より 2012 年に初めて参加させていただいてから、5 回目になります。

どうぞ、よろしくお願いいたします。  
さて、「新城農蚕学校」の「蚕」という漢字は、絹糸を紡ぎ出す「かいこ」という虫を意味します。新城は、古く 1 千年以上前から、伊勢神宮に絹糸を献上してきた土地で、土井先生がこの校歌を作られた大正時代頃までは、「かいこ」から糸を作り出す蚕業（さんぎょう）が盛んでした。

しかし、時代は移り、農林水産業のありようも変化していきました。農蚕学校自体、第二次大戦後には廃校となり、今や、同窓会も解散し、農蚕学校も、その校歌も、語られ、歌われる機会が全く失われています。

そのような状況の中、この校歌の素晴らしさに気がついた地元の音楽家たちによる演奏が実現し、さらに、土井晚翠先生を敬愛する皆さまの前で、世に問いかける機会を持つことができている。新城という土地、そしてその歴史を愛する一人として大変ありがたく感じています。

作曲は、「春は名のみ風の寒さや…」、モーツァルトを思わせる芸術歌曲として名高い「早春賦」ただ 1 曲で後世に名を残す、中田章（なかだあきら）氏。作詞の土井先生とのコラボレーションは、大正時代の日本で望みうるハイレベルな組み合わせであり、あえて日本風な趣からは距離を置いた、西洋クラシック音楽の水準に連なる、高貴なたたずまいさえ感じさせるものです。

さて、本日お聞きいただく校歌の冒頭は、次のように始まります。  
「歴史に名高き戦場近く、産業豊かに地の利を占むる」

織田信長が、大量の火縄銃を駆使して天下無敵の武田の騎馬隊を破った、長篠・設楽原（ながしの・したらがはら）の古戦場近くには、新東名高速道路のインターチェンジも完成し、私たちは「地の利」を実感しながら、土井先生の残した詩を再びかみしめるべき時の到来を迎えました。

それでは、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲の第 1 楽章の旋律を思わせる美しさを持った「新城農蚕学校」校歌、是非ご鑑賞いただければ幸いです。